

英語の特徴のいろいろ

高度情報科学技術研究機構 顧問
能澤正雄

1. はじめに

この欄には、日本で詳しく紹介されていない諸外国の科学者、技術者を取り上げてきた。しかも計算科学に多少の関係があればと考え執筆してきた。それで、複素関数の留数定理などで知られるコーシーの詳しい英語の伝記を入手した。ナポレオン1世の時代に、エコール・ポリテクニクの後的高等学院の「橋と堡壘」(日本で言う土木学校相当?)を卒業後、シェルブールの軍港に派遣され、数週間で、工事に従事する数千人の捕虜の宿舎を建設するなど苦労したようである。コーシーは熱心なキリスト教徒だったようだが当時のフランスの宗教事情がもう一つ腑に落ちず、最後まで読み切れていない。

今回は、最近読んだ英語に関する本(Bill Bryson著“Mother Tongue The English Language” Penguin Books, 1990)が大変に面白かったので、その中から幾つかを紹介してみたい。

現在、世界中で3億人以上の人々が英語を話している。しかも、中国ではアメリカ合衆国の人口よりも多くの人々が英語を学んでいると言われる。この本では、どうして、数世紀にわたって不完全であり、農民の喋る二流の言葉として扱われていたものが、現在、疑いもなく世界語となったか、いろいろな角度から論じられている。

11世紀から12世紀にかけて、アングロサクソンの統治者の跡目争いでイングランドは政

治的に混乱していた。そこへ、フランス西部のノルマンディーからきた有力な武装集団が入ってきて征服し統治者となったのであった。あとで述べるように、これらの征服者は元々はバイキングであり、北フランスに侵入して彼らのノルマン人社会をつくったのであった。そのためイングランドのノルマン人社会は、フランス語を話す上層の貴族階級と英語を話す農民階級の二階層から成っていた。つまり上層階級はヘンリー4世の時代になるまでの約300年もの長い間フランス語起源の言葉を遣い、農民たちは後に英語となる言葉を喋っていたのであった。このため、ノルマンつまり支配階級の英語への影響は、たとえば、法廷、政府、流行などの言葉等に見られる。一方、イギリス農民の言葉からくるものは、食べる、飲む、働く、眠る、遊ぶ、などの言葉が今も続いて用いられている。もう少し詳細に見ていくと、ありきたりの職業と見られるパン焼き屋、水車屋、靴屋などはアングロサクソン名を持ち、熟練を要する職業である石工、塗装工、仕立屋などはフランス語を起源とする。同時に、野原にいる動物は通常、シープ、カウ、オックスなどの英語名を持ち、それらが料理されて食卓に供されると、ビーフ、マトン、ベーコンなど、一般的にフランス語起源の名前になるのである。

2. アングロサクソン

ドイツのハンブルグを北へ約100km行った

所に、デンマークに近いシュレスビグ - ホルスタインと呼ばれる地方がある。このあたりの田舎の宿屋にいと、人々が失われた英語の方言とも言うべき言葉で喋っているのが聞こえる。例えば、ひどく寒い日に誰かが“Veather ist cold”とか、時間を問い合わせるのに“ What ist de clock ”といった具合にである。ドイツのこの地方はAngelnとも呼ばれていたが、昔はゲルマン族の一部族であるアンゲルス(Angels)の地盤であった。彼らは北海をわたってブリテン島に上陸、土着のケルト人を駆逐して定住し、世界で最も知られる言語を作ることになった。

そこから遠くないオランダとドイツの西方の沼などの多い岬地帯、風の吹きさらしの島々に彼らの方言がより英語に関係する言葉を話す人々がいた。これら約30万人の人々はフリジアン(Frisian)と呼ばれ、紀元1世紀頃に今のオランダからベルギー中部の沿岸にかけて住みついた西ゲルマン民族の一員である。彼らの言葉はほんの少ししか時とともに変わることはなく、多くの人の中世の叙事詩を見てすぐに読めるのである。彼らは多くの単語を英語と共有している。例を挙げると、英語のboatに対し、フリジアン語ではboat、比較のためオランダ語とドイツ語ではどうなるかを見るとbootとなる。また、雨は、英語でrain、フリジアン語でrein、オランダ語とドイツ語ではregen、そして英語のgooseはフリジアン語ではgoes、オランダ語ドイツ語ではgansである。

紀元450年前後のこと、ブリテン島からローマ軍団が撤退していくと、上に述べた二つのグループの人々とともに、他の二つの関係の深いグループも同じように北ヨーロッパ地方からブリテン島への長期間にわたる脱出が始まったのであった。サクソン(Saxon)族とジュート(Jute)族である。これらの部族はブリテン島のケルト人たちの牙城であったウエールズ、スコットランド、コーンウォール

を除く各所にそれぞれが自分達の言葉、その中には今も使われているものがあるが、を維持しながら落ちついたのである。永い間には、彼らの間で離合集散を繰り返しながら7つの小さい王国を創ってこの島に定着していったのである。

ところで、その後の詳しいことは不明だがともかく、サクソン族が繁栄し他のアンゲルス族やジュート族は姿を消していった。サクソン族が支配的であったが、この新しい民族国家は徐々にイングランド(England)と呼ばれ、彼らの言葉は英語(English)と言われるようになった。なぜこうなったかは、誰も知らない。

アングロサクソンは文化らしいものをもたず、異教徒であった。そのことは英語の週の名前の4つに残っている。すなわちTuesday ,Wednesday ,Thursday ,Fridayのそれぞれは、彼らの神々の名前Tiw , Woden , ThorとWodenの奥さんのFrigを記念するためにつけられた。ご存じのように、残りのSaturday ,Sunday ,MondayはそれぞれSaturn(土星)、太陽、月からきている。

アングロサクソンが侵入して来た頃、土着のケルト族はすでに文明化していて、法をもち、政府にも慣れていたし、信頼できる警察も持っていたが、文明の行き渡らないローマ帝国の辺境の地から新しく入ってきた戦士たちは原始的な、文字も持たない集団であった。ケルトの人達はすでに水道を用い、セントラルヒーティングも使っていたのであった。これらの文明の利器は征服者の大集団には知られておらず、事実、その後ほとんど1500年の間、これらが普通に用いられるようにはならなかったのである。しかしケルトの人々は4世紀近くの間、ローマ帝国という大文明の恩恵を受けていたのであった。

ケルト人が約1000年、ローマ人が367年ブリテン島にいた訳だが、彼らが後に残していった言葉の上の遺産はそんなに多くない。多く

の英語の地名はケルト起源である。たとえば、AvonとかThamesとかがそれである。ローマ人起源は、Manchesterの -chesterやLan-casterのcasterがそれであってこれらはキャンプのことである。日常生活に使う言葉となるとほとんど見当たらない。ただし、ブリテン島に来る前の大陸にいたときの彼らはローマ人の言葉を取り入れていたのである。例えば、street , pillow , wine , inch , mile , tableそしてchestがある。しかし依然として彼らが日常生活にもちいる言葉は貧弱であった。これらの事情は、597年に聖アウガスティンが40人の伝道師たちを連れてブリテン島に布教のために訪れたことによって根本的に変わった。聖アウガスティンはキリスト教と読み書きの能力開発をこの島にもたらしめたのであった。布教開始から一年以内に、彼はケントの王エティルバートをその小さな首都カンタベリにおいてキリスト教徒に改心させたのである。これが、その後も英国国教会（アングリカン）の最高位の僧がロンドンにいるにも係わらずカンタベリ大僧正と呼ばれる由縁である。これでキリスト教は速やかに島全体に拡がり、人々の読み書きに関する関心を引き起こしたのであった。この時からほんの100年でイングランドはヨーロッパの何処にも負けない文化と学問のセンターとなったのである。

英語は大陸の一地方のゲルマン語の方言であった。それが何時ごろから変化していったのかははっきりとは分からない。当初の言葉では、名詞が男性、女性、中性の性別をもち、語尾変化等の変化が5ケースの場合があった。しかも古英語の性別はしばしば他の現代ヨーロッパ語に見られるように根拠の乏しいものであった。Whatは男性名詞、oatsは女性名詞、cornは中性名詞であった。ドイツ語のpolizei（警察）が女性名詞で、mädchen（娘）が中性名詞であるのに似ている。現代英語では、I/me/mineとhe/him/hisのよう

な代名詞の例を別として変化を放棄してしまった。変化は名詞だけでなく、動詞、形容詞などにもあった。古英語では7つの強動詞と3つの弱動詞の区別があったし、それらの語尾は、数、時制（過去、現在などの）、人称などによっても変化するのであった。

3. バイキング（デーンとも言う）

紀元800年前後から有名なバイキングによるブリテン島を始めとするロシア、アイスランド、フランス、グリーンランドへの破壊と略奪を主とする侵略が始まった。少しの平和な期間を置いて、850年には心配されたとおり、バイキングは350隻の船をテムズ河に乗り入れ遡上した。こんどは定住地としての領地取得の意図をもって侵入、原住民のアングロサクソンのイギリス人とのあいだで各地で争いが続いた。それが878年にあったイギリス人側のある勝利を期に平和条約が結ばれ、ロンドンとチェスター（リバプールの50km南）を結ぶ線を境に南にイギリス人が、北にバイキングのデーン人が住むことになった。このイングランド東北部に住む人の従う法律がデーン法（Danelaw）と呼ばれた。このため、現在でもこの線が北方と南方の方言の分割線となっている。

北方におけるデーン人の影響は甚大であった。彼らの定住した跡は北イングランドにおける地名の1/400箇所以上がスカンジナビア起源のものであることから知れる。永い間、ある場所では古英語のみが話され、他の場所といっても隣の岡の中腹では上代スカンジナビア語のみが話されるといったことが続いた。場所によってはこんなことが数世紀にもわたって行われたが、徐々に二つの言語は混じり合っていた。大変多くの上代スカンジナビア語起源の言葉が英語に採用されていった。たとえば、freckle , leg , skull , meek , rotten , clasp , crawl , dazzle , scream , trust , lift , take , hasband , skyなどが

英語に加わったのである。

ここで筆者が経験した北欧語と英語、ドイツ語の近縁関係について一言述べる。1975年頃にマルピケン・プロジェクトと言う原子力安全に関係する国際共同研究がスエーデンで行われていた。半年に一度位の頻度で運営会議がスエーデンで開かれ、その度に向こうへ行った。場所はノルショピングという所の近くであった。現地語ではこれをNorköpingと書いた。意味は「北市場」である。発音を聞くと英語に慣れた人は、ショッピングだから市場に関係のあることはわかる。ドイツの北へ行くと今でも市場はコッピングと言うとドイツ人が言った。ついでに言うと、コペンハーゲンは、現地語で書くとK benhavnとなる。コペンは市場と想像がつくので、これは商港を現地語で言ったのに過ぎない。

4. ノルマンの征服

もう一つの大変動が英語を待ち受けていた。1066年のノルマン人によるイギリス征服である。このノルマン人というのは、それより逆上ること約200年の860年頃に北フランスに植民したバイキングの人々のことである。彼らがフランスの一地方にノルマンディの名前を与えたことになる。この人々は自らの固有の言葉と文化を捨て、習慣も話し言葉もフランス人と同じになってしまった。彼らが完全に自らの言語をあきらめた証拠の一つは、ノルマディには場所の名前を除いて、一つも古スカンジナビア語が生き残っていないと言う事実である。これはノルマン人が英語に10,000語もの言葉を遺贈したことを考えると驚くべきことである。ノルマン人の喋るフランス語はパリのそれではなく、地方の方言であった。そして日時が経つにつれ、イギリスへわたってからの彼らが喋る言葉の標準フランス語からの逸脱は顕著なものとなっていった。これはアングロノルマン語とも呼ばれる。

ノルマン人の征服を境にして次の300年と

言うもの、英語を喋れるイングランドの王はいなかった。1399年になり、ようやくヘンリー4世が王位についてはじめてイングランドは母国語を英語とする王を戴くことになったのであった。それより前、貴族たちや僧正たちも次々にノルマン人に置き換えられていった。フランス語を話す職人、デザイナー、料理人、学者、書記達がフランスからブリテン島に連れてこられた。これらの人々は支配者が土地の言葉を話さないことを異様に思うことはなかった。ずっと後の1714年になっても、イングランドはドイツのハノーバー選帝侯をジョージ1世として王に迎え入れたのであった。この王の母国語はドイツ語であって、領民の言葉を一つも会得しないまま13年間を君臨したのであった。余談だが、作曲家ヘンデルはドイツ生まれで、ハノーバーにいたが、この選帝侯がいろいろと干渉するので嫌になりロンドンへ逃げたのであった。ところが、あとになってイングランド王としてやって来たので困ったという。ご機嫌取りに「王宮の花火」や「水上の音楽」などを作曲したといわれている。

ノルマン人の喋るアングロノルマン語はパリの標準フランス語とは幾つかの点で違っていた。たとえば、パリジャン（パリの人）の場合、wを発音しない傾向があった。ノルマン人の場合には、quit, question, quarterを発音するのにあたかも, qwit, kquestion, kquarterと綴ってあるように読んだ。パリジャンはこれらを単にkがあるかのように発音した。同様に、パリジャンは語の組み立て要素にcha-を使うのに、ノルマン人はca-を使うのであった。例を挙げると; carry/charrier, cauldron/chaudron, cattle/chattelがある。またノルマン人は接尾語に-arie, -orieを用いるが、フランス人は-aire, -oireを用いるのであった。それで、victory/victoire, salary/salaireという具合になる。さらにアングロノルマン語では、

August, forest, beastであったものがフランス語になるとAoût, forêt, bêteのようにsが見捨てられていった。

ゲルマン語が与えていったように、アングロノルマン語も永続的な強い影響を英語の語彙に与えた。約一万の言葉が採用され、その中の約2/3が現在でも活着しているのである。例を挙げると; justice, jury, felony, traitor petty damage prison marriage, sovereign, parliament, govern, prince, duke, viscount, baronなどがある。貴族の名称のほとんどが入るが, kingとqueenはそうではない。

3世紀の間、英語は公式のものになったことはなかった。まるで漂流するかのように変化した。文化的な中心というか支店がないので地域的な相違が広がる一方であった。ある学者は言う; 初期の中期英語の文章を見ると、方言のケイオス—混沌の印象を受ける。それは発音や綴りの相違、文法と語彙の分散でひどいものだ。

それでも英語は生き残ったのである。英語は農民用の不完全な二流の言葉として扱われてきた。皮肉にもこのことが、英語をしてより簡単に格変化や語尾変化のより少ない言語たらしめるのに役立ったのである。またある学者は言う、英語は主として教育を受けていない人々のものとなっていたので、フランスからきたノルマン人の支配下ではあったが、干渉を受けずに容易に文法が変化していったのだと。

5. チョウサー (1340-1400) とシェイクスピア (1464-1616)

1204年、ノルマン人は出身地であったノルマンディ地方の支配権を失った。ヨーロッパ大陸の国々とイギリス海峡で隔てられているので、徐々にノルマン征服者たちは故郷を追われたフランス人と言うよりも彼ら自身がイングランド人であると考えようになってい

った。ノルマン人と先住民ブリテン人との間の婚姻も増えていった。彼らの子供はフランス語を父から習い、英語は母や乳母から習うのであった。1362年までフランス語が議会用語だった。法廷用語としてはもう少し長生きしたようである。この頃、チョウサー(カンタベリー物語の著者)が活躍していたのだが、フランス語と英語は共存していたと言うべきかもしれない。この時期、オックスフォード大学では学生に教えるのに部分的にせよフランス語を使用すべしとの規則を作った。

時が経つに連れ、ノルマン人達の使う言葉がパリでは理解されなくなり揶揄の対象となっていた。こうしてノルマン人の貴族階級は、劣る方言をかたくなに保存して馬鹿にされるよりも、英語により誇りをもつようになっていったのである。古英語はチョウサーの時代では理解困難になっていた。英語は、文法がより簡単になり、語彙は大変豊富になっていた。例をいくつか挙げると、古英語のmotherhoodに対しmaternityを、friendshipに対しamityを、brotherhoodに対しfraternityを加えていったのである。

14世紀(チョウサー)から16世紀(シェイクスピア)にかけて英語は大きな変化をしていく。ここでは摘み喰い風にいくつかの話を載せたい。

ロンドンのやり方では、第三人称現在単数の動詞の語尾には -nまたは -enを付けていたが、徐々に南方のやり方の -thを付けることになっていった。つまり、lovenがlovethになる訳である。ところが、結局は北方のやり方の -sまたは -esを語尾に付けることになり、現在の形、lovesが残ったのである。シェイクスピアの作品には両方の書きかたが出てきて、あるときはgoesで、他のときにはgoethと自由に使っている。

チョウサーの場合はもっと古い時代になるが、彼はdaughtersの代わりにdoughtrenとか、場合にはdoughtresという形の複数形

を使った。ただし、ここに一つの問題がある。チョウサーの書いたと確認できる原稿が残っていないのである。したがって、書き移した人間が勝手に変えて書いたのか間違っただけなのか、いずれにしてもオリジナルが分からないのだ。

古英語では、複数を表すのに少なくとも6種類の語尾があった。しかし、シェイクスピアの時代になると概して2種類になり、-sと-enだけになった。エリザベス朝(在位1553-1603)時代、人々はshoesと言ったり、shoenと言った。同様に、housesとhousenがあった。現在では、これらの中、三つの古い弱複数形が残っている；children, brethren, oxenである。複数になると他の語尾変化をするものがある。half/halves, grass/graze, grief/grieve, calf/calvesなどである。ただし、古英語は複数形でしこく残っている；men, women, feet, geese, teethである。

シェイクスピアの時代から変わったものと言えば、theeとthouがあり、今では用いられなくなった。もともとは、thouはフランス語のtuがvousに対したようにyouに対するものであった。Thouは親密な関係または社会的に下のものに対して用いられ、youは非個人的なより一般的、対等な言葉である。あるデンマークの学者はこのような変化を評価して「英語はこのようにして、各個人の基本的な権利を尊重する国民に相応しい言葉となったのである」と述べている。

過去に存在しなかったような英語の構造の変化は、作家たちに表現の自由を与えた。この機会を最大限に利用したのがシェイクスピアその人であった。彼は、以前に使われたことのないやり方で名詞を動詞、副詞、形容詞などに自由に用いて効果を挙げた。彼は、実に2,000語もの新語を作り出し、数知れない成句や名文句を我々に残してくれたのであった。

6 おわりに

シェイクスピアの時代以降も英語には多くの微妙な変化があった。例えば、現在進行形の起こりである。我々は、「What are you reading」と言えるけれども、シェイクスピアは「What do you read」と言えるだけであった。彼は、次の文章のような微妙な違いを表現するのに苦労したのである。つまり、「I am going」、「I was going」、「I have been going」、「I will be going」などである。また、「The house is being built」も難しい。

大きく開花した英語ではあったが、しかしながら、多くの人が英語を2流の言語と見做していた。アイザック・ニュートンは主著「プリンキピア」を、フランシス・ベイコンは「ノブム オルガヌム」をそれぞれラテン語で出版した。血液の人体に於ける循環を発見したウィリアム・ハーベイもその論文をラテン語で書いたのであった。

シェイクスピアの時代、英語はブリテン島全体にわたっているのではなく、イングランドとスコットランドの南方ロウランド地帯の言葉であった。しかし、今世紀になるとブリテン島は英語を生まれつきに習得したのでない人を首相に選挙した。ウエールズ語を話すロイド・ジョージ首相である。

1582年リチャード・マルカスターという学者が陰気な調子で書いている。「英語は大したものではない、この我々の島を超えて広がることはないであろう」と。彼には、一つの世代を経ずに英語が新世界にもたらされ、容赦のない勢いで世界語となるのを予見しえるよしもなかった。

これは、Bill Brysonの本の第4章The first thousand yearsの抄訳である。

皆さんも楽しんで読んで頂けたでしょうか。

BILL BRYSON

*Mother
Tongue*



*The English
Language*

'THE SORT OF LINGUISTICS I LIKE, ANECDOTAL, FULL OF
REVELATIONS, AND WITH NOT ONE DULL PARAGRAPH'
- RUTH RENDELL IN THE *SUNDAY TIMES*

